

ひと足先に春を届ける、 つくり手の想い



高橋さんご一家（左から、春二さん、恵美子さん、千夏さん）

西川町啓翁桜プロジェクト

西川町は、山形県のほぼ中央に位置し、月山の麓で総面積の90%が山林を占めている。「日本一の雪国宣言」をしたこの町で、冷涼な気候を活かし、啓翁桜の一大産地化に向けたプロジェクトが進められている。

プロジェクトでは、山間部の傾斜がある農地を活用して、栽培面積の拡大と団地化の整備を実施。併せて、担い手の育成・確保やPR活動を生産者・農協・西川町など関係機関が連携して取り組んでいる。

祖父の代から続く冬のなりわい

啓翁桜プロジェクトの一翼を担う農業女子、高橋千夏さんにお話を伺った。千夏さんは、父・春二さん、母・恵美子さんの家族3人で啓翁桜栽培に取り組んでいる。

高橋家が、啓翁桜栽培を始めたのはプロジェクトが始まるずっと前の、平成4年。千夏さんの祖父・榮五郎さんが、山間部の畑の有効活用と、出稼ぎに代わる冬場の収入源として取り組んだのがきっかけだった。それまで冬になると家族と離れ、11月から4月までの半年間、出稼ぎに行っていた榮五郎さんが「いつも家族と一緒に過ごしたい」と始めた啓翁桜栽培のその想いと共に、代々積み重ねてきたノウハウと技術は、しっかりと孫の千夏さんに受け継がれている。

啓翁桜（けいおうさくら）とは

バラ科サクラ属の落葉低木で、山形県が日本一の出荷量を誇る。

冬期間に出荷できるように休眠に入った花芽を一定期間低温にさらすことで目覚めさせ、休眠打破された啓翁桜は促成栽培により、12月中旬から4月まで、ひと足早く春を彩る観賞用の切り枝として出荷される。

啓翁桜産地の担い手として

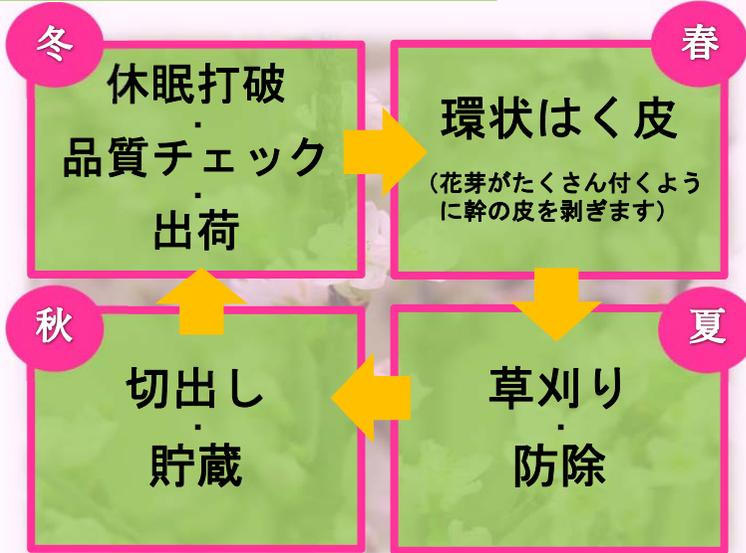
共同集出荷施設で、桜色の作業着をまと
い、蕾の位置、数を見極め、丁寧に軽快に電
動ハサミで出荷作業をする千夏さん。

「幼い頃から、両親の農作業を見ていたの
で、自然と手伝いに入りました。これからも
家族と一緒に、そして周りの生産者の皆さん
と協力して、啓翁桜の産地づくりを進めてい
きたいですね。」と、笑顔で話してくれた千
夏さんが印象的だった。



啓翁桜の畑を案内しながら、1年を通じた
作業のことを話してくれた、千夏さん

促成栽培の作業サイクル



出荷を待つ啓翁桜

花芽が付いていない、短く切られている枝は、定植する苗木



Fairy cute (フェアリーキュート)

西川町の啓翁桜は、『Fairy cute』の名
称で、首都圏を中心に出荷されている。市
場関係者から花の色が鮮やかとの評価で、
首都圏の料亭やホテルなどからも好評だ。
また、ロシアや東南アジアなどにも輸出さ
れている。

西川町では、冷涼な気候条件を利用して、
他産地よりも早い12月下旬に出荷のピー
クを合わせることができ、年末年始の需要
期に多くを出荷できる優位性がある。啓翁
桜は12月下旬から4月まで出荷され、年
末年始やお祝いの事に彩を添えている。ひと
足先に春の訪れを告げる啓翁桜を愛でなが
ら、西川町の啓翁桜のつくり手の想いに触
れてみてはいかがでしょうか。